

## ■ PCN だより

## PCN Volume 64, Number 2 の紹介 (その 2)

先月号では、2010年4月発行のPCN Vol. 64, No. 2に掲載されている海外からの論文について内容を紹介した。今回は、日本国内からの論文について、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

**Regular Article**

## 1. Factors associated with postpartum depression and abusive behavior in mothers with infants

*H. Choi, T. Yamashita, Y. Wada, J. Narumoto, H. Nanri, A. Fujimori, H. Yamamoto, S. Nishizawa, D. Masaki and K. Fukui*

育児期女性における産後うつと虐待行動に関連する因子についての研究

【目的】育児期女性における産後うつと虐待行動の関連、それらに影響する因子についての検討を行った。【方法】日本の複数都市において乳児検診を受診した母親にアンケート調査を実施し、うち解析可能な413名について解析を行った。アンケートは1) オリジナルの質問紙、2) Zung抑うつ自己評価票(ZSDS)、3) Parental Bonding Instrument (PBI)、4) 育児不安尺度(CAS)により構成した。共分散構造分析を行い、設定した構造モデルにおいてはPBI各下位尺度、CAS下位尺度である「中核的育児不安」、「育児感情」、「育児時間」各得点、ZSDS「抑うつ」得点、及び「虐待恐怖」、「虐待行動」の順に影響を与えると仮定した。【結果】413名の母親のうち14.5%がZSDSにおいて50点以上と中等度以上の抑うつ得点を示した。一方、共分散構造分析において「抑うつ」は全変数のうち「中核的育児不安」から最大の影響を受けていたが「虐待行動」には関連していなかった。「中核的育児不安」は「虐待恐怖」に強く関連していたが、「虐待行動」には関連してい

なかった。「育児感情」は「母親ケア」の低さから最大の影響を受け、「抑うつ」に影響し、唯一「虐待行動」に影響した。【結論】これらの結果より、育児に関する過剰な心配(育児不安)は産後うつと虐待恐怖に関連し、子どもに温かい感情を抱けないボンディング困難は虐待行動の主要な予測因子であることが示唆された。ボンディング困難が抑うつを介して虐待行動に与える影響を除外すれば、産後うつは虐待行動の予測因子ではなかったことから、先行研究にて報告された産後うつと虐待行動の相関はボンディング困難の影響下におけるものと考えられた。

## 2. Characteristics of the tree-drawing test in chronic schizophrenia

*A. Kaneda, N. Yasui-Furukori, M. Saito, N. Sugawara, T. Nakagami, H. Furukori and S. Kaneko*

慢性統合失調症における樹木画テストの特徴

【目的】統合失調症の特徴と樹木画テストに関連づけた情報はほとんど存在していないことから、本研究では統合失調症患者と健常人、および統合失調症患者で治療への反応が良好な者と乏しい者との間で樹木画テストの構造的・形態的な比較検討を行った。【方法】202名の慢性統合失調症患者と113名の健常人を対象とした。統合失調症患者はさらに治療への反応性を基に「反応良好者」と「反応不良者」に分類された。全被験者に樹木画テストが施行され、描かれた樹木画は構造的・形態的視点に基づく解析が行われた。【結果】統合失調症患者と健常人の樹木画の比較では幹と枝に有意な差が認められた。一方、統合失調症患者の治療反応良好者と反応不良者との間にはいずれの樹木画の因子においても有意差は認められなかった。重回帰分析によって、描画紙における

樹木画の占める割合、幹の太さ、幹下部の処理方法、枝の先端処理の方法の4因子が統合失調症に有意に関係していることが示された。【結論】本研究では、統合失調症患者の樹木画は健康人の樹木画とは有意に異なるが、その一方で統合失調症患者の間では治療反応良好者と反応不良者には有意な差が認められず、樹木画テストを用いて判別することは困難であることが示唆された。

### 3. Peritraumatic Distress Inventory as a predictor of post-traumatic stress disorder after a severe motor vehicle accident

*D. Nishi, Y. Matsuoka, N. Yonemoto, H. Noguchi, Y. Kim and S. Kanba*

PTSDの予測因子としてのPeritraumatic Distress Inventoryの有用性に関する検討

【目的】周トラウマ期(心的外傷を経験している間とその直後の時期)の苦痛を包括的に評価するための自己記入式質問紙Peritraumatic Distress Inventory (PDI)の日本語版が、PTSDの予測因子として有用であるかどうかを検討することを目的とした。【方法】2005年8月18日から2008年1月8日までの間に、災害医療センターICUに交通外傷で入院した患者を連続的にサンプリングし、事故直後にPDIや人口統計学的背景を聴取した後、事故後1ヵ月時点でPTSD症状を評価した。統計解析としては、事故後1ヵ月時点のPTSD症状(IES-R得点)を従属変数とし、事故直後のPDIを独立変数とし、先行研究においてPTSDとの関連が報告されている因子を調整変数として重回帰分析を行った。また、PDIの予測因子としての精度を検証するため、事故1ヵ月後の構造化面接(CAPS)を完遂した参加者を対象にROC曲線を用いて、感度、特異度、陽性反応的中率、陰性反応的中率を算出した。【結果】79人の対象者が事故1ヵ月後の調査に参加し、64人が構造化面接を完遂した。64人のうち、13人がPTSDもしくは部分PTSDの診断基準を満たした。重回帰分析の結果、事故直後のPDIは事故後1ヵ月時点のPTSD症状を強く予測していた( $p < 0.01$ )。またROC曲線を用いた解析の結果、23点(52点満点)をPDIのカットオ

フ値とした場合、感度は77%、特異度は82%、陽性反応的中率は53%、陰性反応的中率は93%であった。【考察】PDIはPTSDの予測因子として有用であることが示唆された。今後の臨床や研究においてPDIが活用されることが期待される。

### 4. Regional cerebral blood flow changes in female to male gender identity disorder

*H. Nawata, K. Ogomori, M. Tanaka, R. Nishimura, H. Urashima, R. Yano, K. Takano and Y. Kuwabara*

性同一性障害における局所脳血流変化

【目的】性同一性障害(GID: gender identity disorder)は心理的な要因に基づく病態なのか、生物学的な要因に基づく病態なのか、科学的なコンセンサスは得られていない。本研究の目的は、はじめての試みとして、GIDにおける局所脳血流の評価を行うことである。【方法】GIDの診断基準を満たし、身体的に男性である場合をMTF (male to female)、身体的に女性である場合をFTM (female to male)と呼称している。我々は11例のFTM群と、9例の年齢と利き手をマッチングさせた対照女性群を比較した。両群共に、常用している薬物はなく、精神的・身体的な併存疾患もなかった。局所脳血流の比較にあたっては、(99m) Tc-ethyl-cysteinate dimerによるsingle-photon emission computed tomographyのstatistical parametric mapping analysisが用いられた。【結果】FTM群では対照女性群に比較して、左前部帯状回領域の有意な局所脳血流の上昇と、右島回領域における有意な局所脳血流の減少が認められた。【結論】前部帯状回と島回は、人間の性行動や自己意識に関連することが指摘されている領域である。本研究の結果からは、GIDにおける生物学的な要因に関する有益な示唆が得られた。

### 5. Predictors of antidepressant adherence: Results of a Japanese Internet-based survey

*J. Shigemura, T. Ogawa, A. Yoshino, Y. Sato and S. Nomura*

抗うつ薬アドヒアレンスの予測因子：日本におけるインターネット調査の結果

【背景】抗うつ薬 (AD) のアドヒアレンスには性別・年齢などの属性的要因, 薬剤の種類・処方パターンなどの薬理的要因, 薬剤の主観的評価・医師-治療者関係などの心理社会的要因の関連性が報告されているが, 結果は報告によりまちまちである。我々は, 日本での Web 調査を通じて, AD 服用者における低アドヒアレンスの予測因子を検証した。【方法】健康に関する Web モニター登録者のうち, うつ病にて薬物治療下で, 説明と同意が得られた成人 1,151 名の回答を解析した。対象者は, AD の種類・各々の AD をのみ忘れる頻度を 5 段階で回答した。単剤服用者はその回答値を, 多剤服用者は複数回答値の最高値をアドヒアレンスの指標とした。その値を 2 群化して, 低アドヒアレンス (LA) 群を設定した。【結果】全体のうち約 1/3 ( $n=217$ ; 33.1%) の者が LA 群だった。LA は性別・薬剤数・副作用の自覚とは関連がなかった。多変量解析による LA の予測因子は: 1) 若年齢 ( $\leq 34$  歳) ( $OR=1.64$ , 95%  $CI=1.27-2.11$ ), 2) 就労者または学生 (vs. 「主婦・無職」,  $OR=1.87$ ,  $CI=1.38-2.53$ ), 3) 1 日毎の服薬回数  $\geq 2$  回 ( $OR=1.61$ ,  $CI=1.22-2.12$ ), 4) 「良くも悪くもない」か「悪い」医師-患者関係 (vs. 「良い」,  $OR=1.54$ ,  $CI=1.12-2.12$ ) だった ( $p < 0.01$ )。単剤服用者における多変量解析では薬剤間に差を認めず, 前述の 4 項目が同じく LA に関連した。【結論】AD 服用者の LA は若年齢 (34 歳以下), 社会状況 (就労者または学生), 服用回数 (1 日 2 回以上), 医師-患者関係 («良くも悪くもない」ないし「悪い」) によって予測された。

6. Clinical efficacy of individual cognitive behavior therapy for psychophysiological insomnia in 20 outpatients

M. Sato, W. Yamadera, M. Matsushima, H. Itoh and K. Nakayama

精神生理性不眠症外来患者 20 例に対する個人認知行動療法の臨床的効果

【目的】精神生理性不眠症患者の睡眠に関する認知

を観察し, それらの認知における認知行動療法 (以下 CBT) 前後での変化を観察することを本研究の主目的とした。【方法】睡眠障害国際分類第 2 版にて精神生理性不眠症 (以下 PPI) と診断された患者の中で, CBT 治療による不眠症治療を希望し, 治療継続が可能であった 20 例 (女性 14 例, 男性 6 例) を対象に, 東京慈恵会医科大学精神神経科睡眠専門外来において CBT を施行した。対象者の平均年齢は 56.9 歳で, 罹病期間は平均 8.9 年であった。対象者各々に対して, 刺激調整法, 睡眠時間調整法, 認知療法, 睡眠衛生教育からなる同内容の CBT を約 1 ヶ月間にわたり施行した。CBT 施行前後各 7 日間を検索期間とし, 1) ピッツバーグ睡眠質問紙 (Pittsburgh Sleep Quality Index 以下 PSQI), 睡眠に対する非機能的な信念と態度質問票 (Dysfunctional Beliefs and Attitudes about Sleep scale, 以下 DBAS), 睡眠日誌, 2) 携帯型活動計による睡眠指標, 3) 主観的評価 (睡眠日誌) と客観的評価 (活動計) における乖離, 4) DBAS の変化と各睡眠指標における相関, の項目について比較検討した。上記中 3), 4) についての結果を本研究の最も重要な知見とした。【結果】CBT 施行後に 1) PPI 患者の自己の睡眠に対する過小評価が観察された, 2) 睡眠日誌と活動計の乖離度に有意な減少を認めた, 3) DBAS に改善を認めた, 4) 主観的睡眠評価 (睡眠日誌, PSQI) と客観的睡眠評価 (活動計) 双方に改善を認めた, 5) DBAS における “不眠の影響に対する不安” スコアの改善は, 睡眠日誌における離床時刻が早くなることと正の相関を認め, 同様に, DBAS における “睡眠を制御できなくなることへの不安” スコアの改善は PSQI における入眠潜時の減少と正の相関を認めた。【考察】本研究により, PPI 患者が睡眠に関して歪んだ認知を呈していること, また不眠症に対する CBT はそれらの歪んだ認知, 特に睡眠に対する過小評価を修正しそのことにより PPI を改善する臨床効果があることが示唆された。

### Short Communication

1. No association between polymorphism in tyrosine hydroxylase and personality traits in healthy Japanese subjects

*S. Tsuchimine, N. Yasui-Furukori, A. Kaneda, M. Saito, T. Nakagami, N. Sugawara and S. Kaneko*

日本人におけるチロシンヒドロキシラーゼ遺伝子多型とパーソナリティ特性

【目的】ドパミンの代謝や応答に関連する遺伝子多型と人格特性の関連についてこれまで多くの報告があるが、ドパミンの合成に関わるチロシンヒドロキシラーゼ (TH) との関連を報告している研究は少ない。そこで今回は TH 遺伝子における (TCAT)<sub>n</sub> の反復配列多型と人格特性との関連を調べた。【方法】898名の日本人健常者を対象に、TH 遺伝子における (TCAT)<sub>n</sub> の反復配列多型を同定した。人格特性の評価は日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI) を用いた。TCIスコアと TH 遺伝子多型の比較は、T9アレルの保有者群と非保有者群、各遺伝子型群、各アレルのホモ群のみでそれぞれ解析を行った。【結果】T9アレルの保有者群と非保有者群の間でTCIスコアにおける差は認められなかった。また、各遺伝子型群および各アレルのホモ群のみとTCIスコアの間にも差は認められなかった。【結論】これらの結果から、日本人における TH 遺伝子の (TCAT)<sub>n</sub> の反復配列多型とTCIを用いたパーソナリティ特性は関連がないと思われる。

2. Attitudes of early-career psychiatrists in Japan toward child and adolescent psychiatry and their career decision

*M. Tateno, T. Kato, W. Nakano, A. R. Teo, A. Nakagawa, K. Miyajima, S. Kanba, J. Nakamura and T. Saito*

キャリア早期にある日本の精神科医の児童思春期精神医学および職業選択への意識について

本研究の目的は、キャリア早期にある精神科医の児童思春期精神医学への意識について国内調査を行

うものである。対象は、キャリア早期にある精神科医 (精神科経験10年未満) 348名であった。質問紙を郵送し、匿名での回答を依頼した。合計234名が調査に応じた (回答率67.2%)。2004年から導入された新医師臨床研修制度を経験している1~3年目の精神科医では115人中10人 (8.9%) が、従来型の研修を経験している4~10年目の精神科医においては119人中18人 (15.1%) が、児童思春期精神医学に興味があると回答した。初期臨床研修における精神科ローテーションにおいて、十分な児童思春期症例を経験することが、キャリア早期にある精神科医の児童思春期精神医学への関心を高めるために必要なかもしれない。

3. Pilot study of pharmacological treatment for frontotemporal dementia: Effect of Yokukansan on behavioral symptoms

*T. Kimura, H. Hayashida, H. Furukawa and J. Takamatsu*

前頭側頭型認知症の薬理的治療に関する予備的研究：行動障害に対する抑肝散の効果

この研究は、前頭側頭型認知症の行動障害に対する抑肝散の効果を明らかにすることを目的にした。研究デザインは、前向きオープンラベル試験である。20例の前頭側頭型認知症患者に4週間抑肝散を投与し、その前後で行動障害をNeuropsychiatric Inventory (NPI) とStereotypy Rating Inventory (SRI) により評価した。その結果、抑肝散の投与により、NPIとSRIの評点が有意に改善し、2例の低カリウム血症以外は、有害事象や臨床検査上の異常は認められなかった。これらのことより、抑肝散の前頭側頭型認知症の行動障害に対する効果と安全性が示唆された。

(精神神経学雑誌編集委員会)